

## 卒業論文の要旨

論文題目	博物館で幼児が楽しく学べる体験展示の可能性
氏名	山中里帆菜
メジャー	博物館学
<p>(要旨)現在の博物館は、誰もが学べる博物館であることが求められている。ところが、幼児（未就学児）を対象とした展示や環境づくりはまだ不十分である。そこで本論文では、誰もが学べる博物館にするために、幼児を対象とした体験展示の可能性について論じた。</p> <p>来館者は、学びと「娯楽」を目的として来館する。しかし、各国の博物館の定義を比較すると、海外に比べて日本の博物館では楽しみながら学ぶことが浸透していない。そのため、娯楽性のある教育を定義に入れ、楽しみながら学べる展示を増やす必要がある。</p> <p>そこでまず、幼児が遊びを通して学べる展示について検討した。その結果、体験的な展示、なかでもハンズ・オン活用展示は、楽しみながら自由に探求し、疑問を見つけ、理解をすることが可能であるため、幼児の学びに貢献することが分かった。ところが、ハンズ・オンには明確な定義がなく、様々な解釈が可能であるため、押す・触るだけで学びが起こると誤解されやすく、集客目的だけの利用が多いという実情も浮かび上がった。</p> <p>次に、ハンズ・オンの理論的な基盤となる構成主義について考察した。構成主義は、学習者が学習過程で意味や知識を組み立てていく主体性を重視するために、何を見てどんな解釈をしたかは個人の自由であり、その学びについては評価できない。そのため、遊んでいるだけで学びに繋がっていないというジレンマも生じ得ることが明らかとなった。</p> <p>また、構成主義的な博物館展示の事例として、神奈川県立生命の星・地球博物館を取り上げ調査した。フィールドワークの結果、同館のハンズ・オン活用展示は、触る・押すだけでなく、必要なインタラクティブな要素を含んでいることが判明した。</p> <p>最後に、構成主義におけるジレンマを解消する方策として、教育普及に関わるエドゥケーターと学芸員の存在に注目し、その役割について考察した。日本では前者の養成が進まないため、後者が全てを担っているという現状がある。しかし両者は専門性が異なるため、楽しく自由な学びを保障するには、分業化を行い、エドゥケーターの専門性を最大限に生かした展示を作る必要があるという結論に至った。</p> <p>これらの検討を通して、構成主義的な博物館は、学びを強要し唯一の正しい答えを教える場ではなく、さまざまな解釈を知る場であることが改めて浮き彫りとなった。そして、幼児も対象に含むことができる体験展示は、楽しむことから興味や学びへのきっかけを作る可能性を秘めていることが明らかとなった。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>これまで博物館においてもなかなか研究対象とならなかった幼児（未就学児）に焦点を絞り、理論、実践の両面にわたって考察をおこなっている。望ましい体験展示のあり方だけでなく、そのジレンマや課題についても言及することで、体験展示という存在に対して多角的に切り込んでいる。構成主義に関する理論的な動向を幅広くおさえた上で、現地におけるフィールドワークの成果も加味し、説得力のある議論を展開している。よって優秀卒業論文に推薦するものである。</p>	